



子どもの「自立」をどう支えるのか そして「自律」へ

先日の児童朝会で「自立」と「自律」について話をしました。低学年を中心に泣きながら学校に来ている子どもたちがいることを紹介しながら、自分のことは自分でやる！ことの大切さ、そして「学校に行きたくない」「ママと離れたくない」と思っている、自分の気持ちを切り替えて学校に来ること自体ががんばっていることだよと伝えました。

また「自律」についても話しました。「自律」は自分で決められたルールを守っていくことです。もちろん、低学年の内は決められたルールを守ることが中心ですが、高学年になるとルール自体を考えたり作ったりして、守っていくことになります。子どもたちには学校生活で「自立」「自律」していくことが自分の成長につながることを伝えました。

「自立」のために大人が先回りをしない

我が娘が足のケガで松葉づえ生活を送っていました。上手く移動ができないので朝からイライラしていました。2階にある自分の部屋に部活でつかう服を持って降りるのを忘れていました。「う〜〜」と自分に対する怒りを声に出している姿を見て、私は「持ってきたらどうか」と声をかけてしまいました。その直後に妻から「そんなん自分でさせなアカン」とつっこまれました。「たしかに・・・」

こんな日常はよくあることだと思います。私もよくよく思い返して、子どもから「持ってきて」とお願いされたのならまだしも、何も要求されてもない段階で「転ばぬ先の杖をついてしまったな」と反省しました。子どもが困っているときにどうやってそれを乗り越えていくのか？その経験が大切だと分かっていたのについつい先回りをしてしまいそうになりました。ある本を読んでいて「やさしさ虐待」という言葉に出会いました。子どもへのやさしさのつもりが、子どもの自立につながらないことがある、ということです。

安全基地になる ⇒ありのままを受けとめる

子どもが直面した困難を乗り越えるためには家庭が「安全基地」になっていることが大切だと言われています。しんどくなったり、悩んだりしたときには「基地」に帰ってきたら「安心」できる環境に大人がしてあげることが大切だそうです。そして安全基地になるためには「子どものありのままを受けとめる」ことが必要です。成功したことのみを褒めていると、失敗できない、失敗したら受け入れてもらえないという思いが強くなり、挑戦できなかつたり困難に立ち向かえなかつたりするそうです。結果ではなく、がんばった過程や取り組みを褒めてあげることが大切なのだそうです。

千代田中学校におられた坂本修一先生が自身の著書で、不登校の子どもは「赤ちゃんのときと同じように、こんな私でも無条件に愛してくれるのか？」を試しているのではと仮説を立てています。赤ちゃんは、泣いたらおむつを替えてくれたりミルクをくれたりと無条件に愛情を注がれることで愛着関係を築きます。困難な状況に立っている子どもが「もっと私をみて」と愛情を注いでくれるのを待っているのかもしれない。その愛情は「自立」「自律」のためのものでなければなりません。子育てってむずかしいな・・・。